

## 「基盤教育院の木」を完成させる — 基盤教育院のFDの取組みと成果 —

未代 誠仁・松久保 暁子・Brewster, D.  
林 加奈子・池田 智子・室岡 一郎・齋藤 伸子・薛 恩峰

キーワード：教育目標の可視化、Can-do statements、FD、基礎教育の実践

### 概要

大学生が自分に適した専攻を選択する段階においては、基礎的な学力を高めながらキャリアデザインを行う「学びの場」が不可欠である。桜美林大学基盤教育院は主に学内の基礎教育を担当する教育組織として、全学必修科目である英語、コンピュータリテラシー、文章表現、口語表現、キリスト教入門のほか、外国語、日本語を母語としない学生を対象とした日本語、国内外のフィールドスタディーズ、アカデミック・キャリアガイダンス科目などを提供し、学生の基礎学力向上と可能性の発見を支援してきた。

基礎教育は学生にとって「将来につながる学びの途上」であり、科目ごとの習熟度を正しく把握することは学生が自分の適性を見極める上で重要である。基盤教育院では、提供する授業科目ごとの目標と実施計画をスモールステップの形で成績評価とリンクする方法を提案・実現し、習熟度に対する学生の理解を支援してきた。

また、基礎教育全体を一つの学びの場と捉え、文章表現とコンピュータリテラシーでの学びを生かしたレポート作成、口語表現や外国語での学びを生かした自己表現、キリスト教入門で学ぶ本学建学の精神を他科目の学びにおいて実践することなど、提供科目の横断的連携にも取り組んできた。このような科目横断的な連携を実現するために、提供科目ごとの学習目標と授業計画を基盤教育院全体で共有する「基盤教育スタンダード」の構築を進めながら、効果的な学びの場と機会の提供を目指してきた。

基礎教育に対する上記の方針・方策が生まれる上で、基盤教育院が実施するFDは重要な役割を果たしてきた。特に、毎年3月に実施するFDでは、専任教員らが一堂に会しての議論を行ってきた。その議論の中で、各科目の目標を大きめの紙に張り付けて関連を示した「基盤教育院の木」が生まれた。本稿は、2013と2014年度のFDを企画運営した著者が、基盤教育院の木の作成に至った経緯、木の作成方法、2015年3月のFDにおける成果と考察、および今後の基礎教育についての考えを述べたものである。

## 1. 基盤教育院 FD の変遷

基盤教育院が提供する科目やプログラムでは、専任教員及び非常勤講師の複数名で同じ科目を担当しているため、科目やプログラムごとに活発にFDが実施されている。さらに2007年度から年に1回、専任教員を対象としたFDを実施している。

2007年度から2009年度は箱根で2日間にわたって実施されており、基盤教育院長とチェアが中心となって企画運営されていた(表1)。特に2007年度は基盤教育院が発足した年であるため、教員間の交流や基盤教育院についての共通認識を図ることが主な目的となっていた。

表1 2007～2009年度FDの概要(開催場所：湯本富士屋ホテル)

年度(日程)	テーマ	方法
2007年度 (2008年3月4日～3月5日)	①2007年度教育研究活動の総括と2008年度の目標設定 ②基盤教育院内の相互理解、認識、協力関係の構築	科目コーディネータによる発表 & グループディスカッション。
2008年度 (2009年3月4日～3月5日)	基盤教育院授業科目における授業管理の現状	事前に実施した学生行動(授業出席、マナー、コミュニケーション)についてのアンケートの回答結果のデータを提示。科目コーディネータによる発表の後、学生相談室のカウンセラーによる報告グループディスカッション。
2009年度 (2010年3月2日～3月3日)	「基盤教育院が求める学士力」 ①教育目標はなにか ②達成できていること、成果はなにか ③問題点、今後の課題はなにか ④各科目からみた「基盤教育院スタンダード」の可能性	左記4点について、科目コーディネータによる発表後、グループでディスカッション。

その他、基盤教育院と学群制について理解を深めるために、専任教員と非常勤講師による下記の合同研修会を実施した。

日程：2008年7月2日(水)

場所：ホテルセンチュリー相模大野

テーマ：「基盤教育院と学群」(The Cornerstone and Cluster Colleges)

方法：基盤教育院長、コーディネータによる発表、意見交換

その後、2010年度にはFD委員会が発足(2013年度から教務・FD委員会に改編)したため、委員会のメンバーが中心となって企画運営し、「基盤教育スタンダードの構築に向けて」という統一のテーマを掲げて、主にワークショップ形式でのFDが実施されてきた。委員会ではFDの振り返りを行ない、次年度に向けて準備を行なうことで、情報共有にとどまらず、各授業運営に有益なFDが実施された。また統一したテーマで実施することで、連続性のあり、かつ充実した議論が展開された。2010年度から2013年度までのテーマ、方法は表2の通りである。また、2010年度から2013年度までのFDの実施内容の詳細については、齋藤他(2013)、未代他(2015)を参照されたい。

FDの活動を通して、基盤教育院では基礎教育を受けた後の学生のビジョンを明確にし、科目ごとの目標の可視化に努めてきた。そして、2013年度のFDにおいて、各科目の目標を大きめの紙に張り付けて関連を示した「基盤教育院の木」が生まれた(図1)。

表2 2010～2013年度FDの概要(開催場所:桜美林大学多摩アカデミーヒルズ)

年度(日程)	テーマ	方法
2010年度 (2011年3月9日)	基盤教育スタンダードの構築に向けて1 —1年後のさくらさん	グループワークを中心としたワークショップ
2011年度 (2012年3月7日)	基盤教育スタンダードの構築に向けて2 —現実のさくらさんに向き合う—入学時と1年後	
2012年度 (2013年3月6日)	基盤教育スタンダードの構築に向けて3 —目標達成度の評価	
2013年度 (2014年3月5日)	基盤教育スタンダードの構築に向けて4 —基盤教育院の木をつくる	

## 2. 2014年度のFDと「基盤教育院の木」の再構築

著者は、教務・FD委員会メンバーとして2014年度FDの企画運営を担当するにあたり、FD全体の目標を「2013年度に作成した『基盤教育院の木』の再構築」と定めた。表3に示す通り、基盤教育院は本学の基礎教育を担う様々な授業を提供している。基盤教育院の木とは、各科目の到達目標を葉として、それらの共通の到達目標を枝・幹として、そして学生が入学時点で習得しておいてほしい知識・技術などを根として持つ木のイメージであり、科目ごとの目標を基盤教育院全体の視点で俯瞰し、基礎教育の枠組みの中で各科目が持つ役割を可視化することを目指したものである。

表3 基盤教育院が提供する主な科目／科目群

区分*	科目／科目群
口語・文章表現	口語表現
	文章表現／文章構成法
コンピュータリテラシー	コンピュータリテラシー
キリスト教	キリスト教入門
	キリスト教理解 各科目
アカデミックガイダンス	自己実現とキャリアデザイン
	大学での学びと経験
	数の基礎理解
学問基礎	学問基礎 各科目
フィールドスタディーズ	語学研修・国際理解教育・地域社会参加
英語	英語
日本語および英語以外の外国語	アラビア語・イタリア語・インドネシア語・カンボジア語・ロシア語・スペイン語・タイ語・中国語・ドイツ語・ビルマ語・フランス語・ベトナム語・ポルトガル語・モンゴル語・ラテン語・ロシア語
日本語	日本語

※授業の目的・性質を踏まえた9区分

図1は、2013年度に作成された基盤教育院の木である。ただし、枝の先には108の到達目標、幹には39の共通目標、根には37の知識・技術が、それぞれ細目として含まれている。詳細は未代他(2015)を参照されたい。

2014年度に上記の木を再構築するにあたって、基盤教育院の外の意見を集めることから作業を開始した。基盤教育院が提供する各科目の目標を、専門科目を含む将来の学びにおいて有益なものにする上で、多数の専門科目を提供する学群の視点、および大学の教育全体を包括的に捉える視点は不可欠である。そこで、2014年度のFD実施に先立ち、『OBIRIN TODAY』第15号に掲載された論考に対して、本学の学長、教育担当副学長、4学群の学群長、および大学教育開発センター長から所見をいただいた。

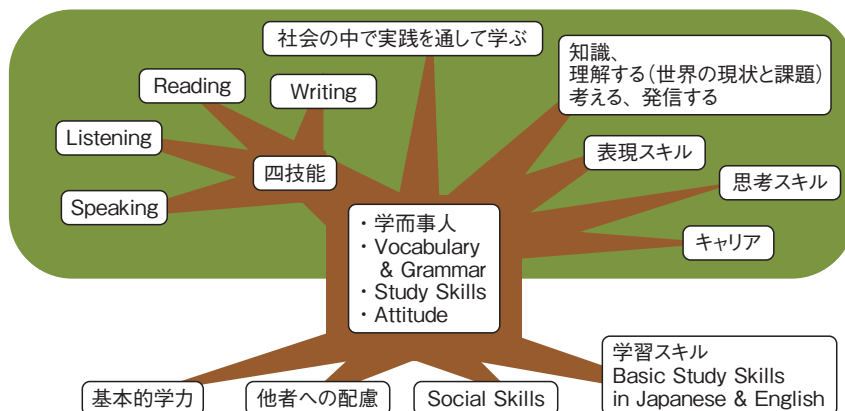


図1 2013年度に作成した基盤教育院の木

続いて、2013年度の基盤教育院の木に対して幹・枝の見直しを行った。2013年度の幹・枝は、各科目の担当教員が選定した目標の共通部分を抽出して作成したが、基盤教育院としての俯瞰的な視点は十分に反映されていなかった。そこで、本学建学の精神である「学而事人」(学びて人に仕える)を幹に据え、そこから生える6本の太い枝を定めた(図2)。なお、根については4章で取り上げる。

FDに参加する基盤教育院の各教員は、FD当日に向けた準備作業として、科目ごとの到達目標を太い枝ごとに整理した。個々の到達目標を1枚の付箋にcan-do形式で記載し、到達目標が属する太い枝を1～6の番号で併記した。FD実施時点での基盤教育院の枠組みにとらわれず、基礎教育としての視点から必要となる目標も付箋に記載できるものとした。

FD当日は、大学教育開発センター長に基調講演をご担当いただき、学内外の基礎教育が抱える課題を参加者全体で共有した。また、先述の所見を披露し、基盤教育院の外の意見を参加者が理解・確認する機会とした。

続くグループワークでは、基盤教育院以外からの意見および基調講演の内容を踏まえながら、太い枝ごとの到達目標を整理した。ここでは、太い枝ごとに5～7名の教員をグループとして割り当て、太い枝ごとの到達目標に対して当該グループの判断で次の(1)～(5)の作業を行った。

- (1) 同一内容の到達目標が複数ある場合は1枚の付箋にまとめる
- (2) 別の太い枝に属すると判断した到達目標は該当する太い枝に移動する
- (3) 一つの到達目標が複数の太い枝に属すると判断した場合は付箋を複製して該当するすべての太い枝に追加する

- (4) 到達目標がいずれの太い枝にも属しないと判断した場合は付箋を取り除く  
 (5) 各枝の付箋の中で類似性が高いものをまとめた「細い枝」を作り名前を付ける

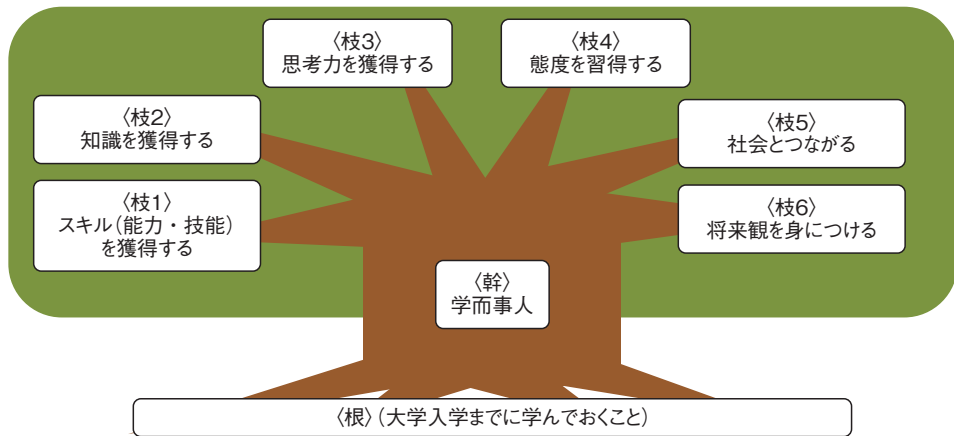


図2 2014年度の基盤教育院の木

### 3. 太い枝ごとの概要

ここでは、太い枝ごとにまとめられた到達目標を示す。本章では①、②などの数字が細い枝を表す。なお、ページ数の関係ですべての付箋を列挙できないため、細い枝ごとの内容は「代表的な到達目標の列挙」としてある。

#### 【枝1：スキル(能力、技能)を獲得する】

スキルに関する到達目標には、科目／科目群の特性ごとの差が大きく表れた。そこで、集まった76の到達目標を、①口語・文章表現、②コンピュータリテラシー、③アカデミックガイダンス、④フィールドスタディーズ、⑤英語、⑥日本語および英語以外の外国語+日本語、の区分別の細い枝に分類し、到達目標の内容に応じた名前を付けた。

#### ①使用言語を特定しない発信能力

◆読者に伝わり、かつ紋切型ではない語が選択できる。◆ふさわしい文体が選択できる。◆書式を守った手紙を書くことができる。◆筆者の体験や観点到読み手が深く共感できる随筆が書ける。◆根拠と共に主張を正確かつ論理的に述べ、読み手を納得させる論文を書くことができる。◆メモを持たずに3分間スピーチができる。◆筋道を立てて

スピーチができる。◆発表態度を意識してスピーチできる。◆他者のスピーチに適切なアドバイスができる。

## ②コンピュータ利用スキル

◆読み手・聞き手にとって重要性が高い情報だけを表示、可視化できる。◆情報の安全性を確保するためにすべきことや、してはならないことを区別することができる。◆情報機器をインターネットに接続できる。◆ExcelやWordの機能を活用し、文書作成や課題の遂行ができる。◆読みやすい文書、効果的なプレゼンテーション用スライドの作成ができる。

## ③大学生としてふさわしい意思疎通・伝達能力

◆レポートの書き方を身につける。◆受け手に配慮したメールを書くことができる。◆自分の考えを相手にわかりやすく正確に伝えることができる。◆敬語が正しく使える。

## ④学内にとどまらない、価値観の多様性を尊重した伝達および行動能力

◆世代や考えの異なる人と円満なコミュニケーションをとることができる。◆体験あるいは学習を通して学んだことから自分の意見を組み立て、他者に論理的に説明できる。◆外国人とコミュニケーションすることができる。◆様々な情報から適切な情報を取捨選択することができる。◆海外で自分の安全をコントロールし、一人で旅行することができる。

## ⑤英語の学習・コミュニケーションスキル

◆辞書や参考書などが効果的に使える。◆本、新聞、インターネットなどのメディアから必要な情報を得ることができる。◆興味のある話題や一般的な話題の読み物の大筋を理解できる。◆相手の話す事実や意見の大筋を理解できる。◆辞書に頼りすぎることなく読める。◆講義を聞いてノートが取れる。◆ある文化について学んだことを英語で書いたり話したりできる。◆身近なことや社会の出来事について意見を述べることができる。◆身近な話題でインタビューできる。◆頻出単語2000語を正しく使える。◆身近な話題について4～5段落の文章が適切な構成で書ける。◆短期留学先で街に出て自由に行動できる。

## ⑥第二言語または外国語のスキル

◆当該言語の文字が読め、書ける。◆特殊文字をパソコンで書くことができる。◆身の回りのことについて聞き、話すことができる。◆日常生活で目的が達成できる。◆母語話者とメールでやりとりし、意思疎通ができる。◆課題の指示が理解できる。◆専門用語を含む講義の内容が理解できる。◆講義を聞き、適切に質問ができる。◆ニュースや新聞のキーワードから内容が理解できる。◆海外の当該言語使用者とつながり、意見を言うことができる。

**【枝2：知識を獲得する】**

52の到達目標を7つの細い枝に整理した。細い枝ごとの到達目標の数には大きな違いがあり、最も多いのは「言語知識 (Language knowledge)」で15であった。

**①キャリアの知識**

◆SPI対策として、中学・高校の基礎学力を身につける。

**②引用の規則の知識 (Knowledge for citation)**

◆著作権と引用の規則を知り、何をどう調べたらよいか、引用したらよいかわかる。

**③実用的言語知識**

◆少ない文字数で情報を効果的に表示・伝達するスライドを作成できる。◆講義を聞いてノートがとれる。◆各種の構成方法、段落の機能、一文の構造、句読点の役割、比較といった、文章表現に関わる基礎知識を身につけている。◆論理的に飛躍のない小論文が書ける。◆スピーチの基本的な組み立てが理解できる。

**④社会、文化の知識**

◆Has an awareness of issues regarding Japanese society and some idea of global issues. ◆日本語は日本語母語話者だけで使っているものではないということを理解する。◆桜美林大学、自分が所属する学群をよく知る。◆キリスト教および他宗教に関しての基本的理解と、基本的知識の活用ができる。◆社会の仕組み(公・共・私の役割)や社会構造、市民活動の意義を理解できる。

**⑤言語知識**

◆Has a reasonable grasp of linguistic knowledge in L1 & L2. ◆エッセイ、パラグラフの書き方がわかる。◆まとまりのある英文を読み、重要なポイントを把握することができる。◆代表的な文法(ディスコースレベル、センテンスレベル)を知っている。◆日常に必要な英語の語彙を知っている。

**⑥IT知識**

◆情報選択や数値情報の可視化のために、Excelの機能を活用することができる。

**⑦学習ツールについての知識**

◆読み方のわからない漢字を手書き機能で入力することができる。◆Excelの関数・計算式、オートフィル機能を用いて演算を効率的に処置できる。◆本、新聞、インターネットなどのメディアから必要な情報を得ることができ、辞書や参考書などのツールを効果的に使うことができる。



### 【枝3：思考力を獲得する】

総合的な学習体験と創造的な思考力・判断力・表現力の育成は、学士課程教育における柱の一つである。これら諸力の育成によって、幅広い知識を基に物事の全体を俯瞰して本質を洞察する力が成長・発展する。この太い枝には、学生たちの基礎的な思考力の向上に主眼を置いた到達目標が数多く集まった。分類の結果を以下に示す。

#### ①自己管理・分析・振り返り (Thinking and self-management/autonomy)

◆ 次回の発表に向けて、今の問題点を見つけ、それを改善することができる。◆ Student can understand his/her learning styles and knows which methods are best for acquiring knowledge.

#### ②思考・理解 (Thinking and comprehension/understanding)

◆ 論理的思考の重要性について論じることができる。◆ 物事に多角的、批判的な検討を加え、論証的な方法で考察する。◆ 文章の中で分からない単語が出てきても、文脈からその意味を類推できる。◆ ロマン系言語の中では一つ学んだ言語を基に、他言語の分の意味を類推できる。

#### ③思考力・社会とつながる (Thinking and connecting with society)

◆ 社会問題の原因、現状、結果を多角的に分析し、その解決策を練ることができる。◆ 自国の文化と異文化の違いを分析的に比較し、異なる文化や価値観を持つ人々が共存するための方法を考えることができる。◆ 言語に対する定義の多様性を知り、物事の答えは一つではないことを知る。◆ キリスト教を始め、諸宗教に関する知識を修得し、歴史的諸相、国際問題をもっと掘り下げて捉えることができる。◆ Can demonstrate a paradigm shift / intercultural realization of a significant difference between Japan and the target culture.

#### ④思考と発信 (Thinking and expression)

◆ 原因・結果・目的・譲歩・条件・仮定などの表現を用いて、論理的な文章を書くことができる。◆ 踏み込んだ考察、多角的考察、批判的考察、論理的考察をふまえた文章を書くことができる。◆ 日本語と英語の違いを分析的に比較し、それぞれの使用に活かすことができる。◆ 論理的な思考法を身につけ、レポートや実験・調査研究論文を書くことができる。◆ Can reform basic logical functions in reading, writing and speaking. ◆ Can create an outline of their ideas and defend their position on various topics. ◆ Can participate in a discussion with other students and ask questions on topic. ◆ Can give their own position when contradictory positions are presented. ◆ Can listen to teacher's

ideas and formulate their own opinions. ◆ Can understand that their actions will have results (negative or positive) .

#### 【枝4：態度を習得する】

到達目標を8つの細い枝に分けた。この項には63の到達目標が含まれており、その1/3にあたる21は英語(英語コア)の到達目標だった。また次に多かったのは英語以外の外国語と文章・口語表現で、各11だった。以下、細い枝ごとのラベルと、それぞれに属する到達目標の一部を紹介する。

##### ①どのように学習するか／ How to study

◆苦手意識を克服し、むしろ積極的に文章を通して自らの感情や思考を他者と共有することができる。◆わからないこと、興味を持ったことを調べる態度が身に付く。

##### ②論理的思考を育てる／ Logicality and autonomous study

◆論理立てて考える態度が養われる。◆人間や物事を客観的に観察することができる。

##### ③マナー／ Manners

◆ Can behave like an adult. ◆ Can conduct themselves in a manner which is conducive to study / learning. ◆ Can respect their peers who may be of mixed-ability. ◆大学生としての必要最低限の受講マナー(話を聞く姿勢、ノートをとる、私語や遅刻をしない)を守ることができる。

##### ④他者へのいたわり、尊重を重んじる／ Take care of people who are in need of help.

◆他者と協働しながら学ぶことができる。

##### ⑤インターネットを通して自分に必要な情報を得る／ Confident in ability to find relevant information on the Internet

◆学習言語のインターネットサイトを怖れることなく訪れることができる。

##### ⑥あきらめないで外国語学習に取り組む／ Active in learning foreign languages ; Never give up.

◆外国語の母語話者と臆することなく接することができる。◆ほぼ毎日、自分一人で外国語の学習を続けることができる。

##### ⑦外国語で積極的に話したり書いたりすることができる／ Positive in writing and speaking

◆異なる宗教に対する礼節を弁えることができる。◆常に読者を意識しながら書くことができる。

##### ⑧異文化と共有／ Show cultural awareness, sensitivity.

◆文化や考え方の多様性を理解し、自分と異なるものに寛容的な態度で接することがで

きる。◆多様な宗教習慣を考慮し他者と関わるができる。

### 【枝5：社会とつながる】

口語・文章表現、コンピュータリテラシー、キリスト教、アカデミックガイダンス、ワールドスタディーズ、英語、英語以外の外国語・日本語の各区分に属する科目／科目群から、約50の到達目標が集まった。これらの到達目標を、①社会への意識・関心、②ニュースリテラシー、③コミュニケーション能力、④効果的な発信、⑤ボランティア、⑥社会的活動、の6つの細い枝に分類した。

#### ①社会への意識・関心

◆社会の仕組みに目を向けて、社会と自分との関わりを考えることができる。◆講演会やイベントに関心を持って参加することができる。◆ Show a good level of understanding and acceptance of cultural difference. ◆ Develop an interest in a specific current issue and acquire a more than surface knowledge on the subjects.

#### ②ニュースリテラシー

◆新聞・ニュースに目を通し、世界に積極的に関わる姿勢を持ち、生活することができる。◆世界で起こっているさまざまな問題を知り、比較し、分析することができる。

#### ③コミュニケーション能力

◆家族・親しい友人以外の人や国境を越えた友人とのネットワークを維持することができる。◆マナーを守ってインターネット上のコミュニケーションをとることができる。

#### ④効果的な発信

◆自らの感情や思考を文章あるいは口語で公に表現することにより、広く深く社会と関わるができる。◆著作権を含む知的財産権を尊重した情報の発信ができる。◆インターネットの性質や危険性を理解し、情報の発信をすることができる。

#### ⑤ボランティア

◆キリスト教精神(隣人愛など)を実践できる。◆他者への思いやりを忘れず、ボランティアを通して社会と関わり生活することができる。◆ Determine a need and contribute to Japan in their own specific way.

#### ⑥社会的活動

◆社会問題についての情報を収集し、議論や市民運動に参加できる。◆ Student is aware of his/her wider communities, both in Japan and worldwide, and can appropriately negotiate a place within them. Student can participate as a “global citizen”. ◆ Student questions his or her role in society and, more specifically, ways to improve society.

**【枝6：将来観を身につける】**

大学在籍中の近い未来から大学卒業後の遠い未来まで、常に将来を視野に入れて学び続ける姿勢や力を「将来観」と名付けた。それを身につけることは、どの科目においても「学而事人を体現するために不可欠な到達目標」として位置づけられているといえるだろう。具体的には、以下、大きく三つのグループに分けて示すことができる。

**①生涯にわたって主体的かつ能動的に学び続ける姿勢に関わること**

◆なにごとにおいても、自ら目標を設定し、それを達成するまでのスケジュールを立てられる(たとえば、在学中は卒業後の将来を視野に入れた学修計画を立てられる)。◆自分の強みと弱みがわかり、強みを活かす目標を設定でき、また、状況によって柔軟に目標を修正できる。◆言葉によるコミュニケーションは、仕事をすることも含め、生涯にわたって重要な意味をもつ行為であることを理解している。◆仕事での活用も視野に入れ、大学卒業後も日本語や外国語の能力をさらに高める意思をもち、自ら勉強の機会を作ることができる(たとえば、外国語学校や社会人講座の活用)。◆就職後も、様々な学びの場、社会活動などにおいて、コンピュータの活用方法を考えられる。◆大学で学んだ外国語をさらに磨き、仕事の現場でも外国語を使ったコミュニケーションができる(たとえば、外国語Eメールの読解ならびに作成、ワードやパワーポイントといったソフトの外国語での使用)。◆外国語で日本について伝えることができる。

**②自己理解と職業観の深化に関わること**

◆キリスト教的価値観を自らの将来設計の一助として活用できる。◆キリスト教および建学の精神に基づき、積極的かつ肯定的将来観をもつことができる。◆将来、仕事や私生活(旅行や趣味、友人関係など)で外国語を使うイメージをもてる。◆自分の性格、適性、能力などを客観的に見極め、自己PRができる。◆企業研究にも関心をもち、どのような職業があるかを理解する。◆卒業後、どんな大人になりたいか、自分の未来像を意識できるようになる。◆世界の構造や動きを知り、それらを視野に入れた職業観をもてる。◆自分のためだけに働くのではなく、他者や社会のために働くという意識をもてる。◆柔軟かつ主体的な個人として仕事に就く用意ができており、21世紀におけるキャリアの意味や特質を知ったうえで、変化にも対応できる。◆外国語を学習する際に、将来、就きたい職業や国際社会の動向を視野に入れて、一定分野に強みのある外国語を的確に選択できる。

**③社会の一員(あるいは「世界の一員」)としての自覚に関わること**

◆国際社会も含めて変化する社会状況のなかで、それと自分の生活とを関連づけて考え、自分の職業観をもてる。◆獲得した知識を将来の日本社会ならびに国際社会の動向

に対する自らの振る舞いの基礎として位置づけられる。◆社会や世界の「あるべき姿」や「理想像」を構想できる。

#### 4. 「基盤教育院の木」の考察

本章では、2014年度のFDで作成した基盤教育院の木について考察を行う。

2014年度は、学而事人を幹とする6本の太い枝を先に定めた上で、科目ごとの到達目標を募り、整理した。その成果として、2013年度の「基盤教育院の木」には含まれなかった到達目標を数多く得ることができた。たとえば、「社会とつながる」の枝には、2013年度はキリスト教およびフィールドスタディーズの科目区分に属する科目の到達目標が主であったが、本来ならばより多くの科目が社会とつながるための目標を持つはずである。2014年度は事前に太い枝を定めて到達目標を募ったことで、口語・文章表現、コンピュータリテラシー、アカデミックガイダンス、英語、日本語および英語以外の外国語、日本語、の各区分に属する科目からも多数の到達目標を得るに至り、この太い枝が重要な共通目標であることを明示することができた。

グループワークにおいて木から取り除かれた到達目標の取り扱い方には今後の議論が必要となる。該当する到達目標の例として、コンピュータリテラシーにおける「情報機器が故障することを見越して重要な情報のバックアップを行うことができる」を挙げる。バーチャルをリアルに紐づけると「大規模な備忘録の作成」と表現できるが、他科目で備忘録の作成が目標となることはない。そのため、基盤教育院の木という共通の枠組みの中で存在場所を得ることはできなかつたと考えられる。コンピュータに限らず、比較的新しい概念で構築された学びの対象には、到達目標にも新たな枠組みが必要となるのかもしれない。

基盤教育院の木は、学生に求める can-do 形式の到達目標の集合体である。最終的には、これらの到達目標を教員および教育組織の目標に焼き直す必要がある。3章で挙げた到達目標には、学生に対して「学ぶことへの高いモチベーション」を求めるものが多い。教員の目標に置き換えると、学生のモチベーションを維持・向上させる教育の提供が必要ということになる。基盤教育院では、英語におけるレベル別クラス開講、履修者の習熟度に応じた多段階での学習課題の設定、各種学習センターにおける学生への支援などを通して、基礎教育の課程にある学生の can-do を支援してきた。今後も、一人ひとりの履修者に寄り添った教育の実践を通して、基礎教育の価値を高めていくことが求められる。

2014年度のFDでは、基盤教育院の木における根、すなわち入学時点での学生の学力について特段の議論は行わなかった。これは、2013年度までのFDにおいて十分な時間

をかけた議論を実施し、基盤教育院内で問題意識を共有できた点を踏まえてのことである。ただし、入学生の学力の多様化に積極的な対応を行うことは今後も重要であり続ける。例として、基盤教育院の木の本の根にある「基本的な英語の語彙の知識がある」という付箋を挙げる。入学時点での語彙力は、基礎教育における英語学習のスタートラインと現実的なゴールライン、およびそれに続く専門科目の学習内容に影響する。この点を踏まえつつ、基礎教育を担う教員および教育組織には「現実的なゴールライン」を可能な限り押し上げる工夫が求められる。入学生の学力の多様性を見極め、適切な学びのプランの提供を通して根と向き合うことが大事である。

2014年度の基盤教育院の木には、専門科目を含む「基礎教育後の学び」を見据えた達成目標を多数含めることができた。本学の基礎教育における目標を具現化した基盤教育院の木は、これによって完成したといえるだろう。図3に、完成した木を示す。ただし、今後も社会と学生のニーズ、およびそれらに対する本学の教育方針を踏まえた基礎教育の目標設定については常にブラッシュアップを続けていく必要がある。

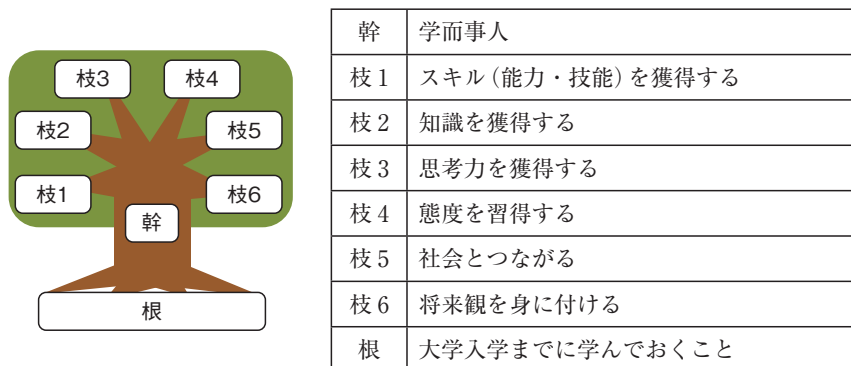


図3 完成した基盤教育院の木

## 5. おわりに

本章では、これまでの基盤教育院での様々な議論を踏まえながら、本学における基礎教育の在り方について筆者の考えを述べる。

大学は、選択科目、専攻などの形で学生に「学ぶ自由」を提供している。この自由が学生にとって有益であるためには、品質の高い基礎教育が欠かせない。専門的な学びに踏み出す段階で、個々の学生は基礎教育を経て自身の学びの基盤を固め、また可能性を見極め

ておくべきである。初年次教育を含む大学の基礎教育として、入学生の学力と専門的学びに必要な学力の差を見据えた学びの場を提供し続けることが、大学の価値を支える重要な柱となるものと考えられる。

基礎教育の実装は、大学のポリシーと提供科目・専攻に応じて行う必要がある。学生一人ひとりに幅広い自由を提供するのであれば、基礎教育にも幅の広さが求められる。学びの深さを重視するのであれば、深さに耐える洗練された基礎教育が必要となる。ただし、いずれの場合においても、学生が「自身の求める世界に資する人材になる」ために、基礎教育の重要性が変わることはない。

本学では、学群制という形で一人ひとりの学生に幅広い学びを提供してきた。一方で、学科・専攻などの細分化と専門性の深化を進めている大学も多数存在する。今後も、大学の学びの在り方について多様な議論が行われ、それらに対する様々なソリューションが提案・実装されることになるだろう。

2016年度より、新学群の設立に伴い、本学の基礎教育も見直されようとしていることも、そのような議論・ソリューションの一例となる。しかし、どのようなソリューションを採用にしても、学生の学ぶ自由が基礎教育によって確保される点は定性的に不変である。今後は各学群が基礎教育の直接の担い手となり、入学生の学力の多様化と直接向き合い、個々の学生に可能性を見極める機会を提供する主導的役割を担うことになるかもしれない。本稿を含めて、基盤教育院における議論と教育の実践を通して得られた成果が、今後の本学の基礎教育に何らかの形で寄与することができれば幸いである。

## 参考(引用)文献

- 未代誠仁、松久保暁子、Brewster, Damon、林加奈子、池田智子、室岡一郎、齋藤伸子、薛恩峰. 2015. 「「基盤教育院の木」をつくる— 基盤教育院のFDの取組みと成果 —」『OBIRIN TODAY 教育の現場から』第15号(105-120).
- 齋藤伸子、Brewster, Damon、石川三千夫、未代誠仁、松久保暁子、清水貴恵. 2013. 「ワークショップ形式のFDを通して「現実の学生」に向き合う —1年後のさくらさん—」『OBIRIN TODAY 教育の現場から』第13号(103-117).